



Title	Group-Level Self-Regulation in Self-Directed Learning [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	譚, 翠玲
Citation	北海道大学. 博士(国際広報メディア) 甲第15810号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91960
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Tam_Chuling_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

(様式4)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）

氏名： 譚 翠玲

学位論文題名

Group-Level Self-Regulation in Self-Directed Learning

(自己主導型学習におけるグループ・レベル自己調整)

本研究の目的は、自己主導型学習におけるグループ・レベルの自己調整を、オンラインでのタンドム学習による外国語学習者を対象に明らかにすることである。オンラインによる自律的外国語学習は急激に増えているが、学習を継続できる者は非常に少ない。著者は、自律学習遂行のための自己調整技能の欠如が影響しているのではないかと推測した。自己主導型学習における自己調整技能に関する研究は、これまで個人学習を中心に実施されてきた。しかし、協働学習が広く取り入れられるようになり、また、とりわけ外国語学習では学習者どうしの活動が重要な役割を持つことを考えると、グループ・レベルの自己調整に対する理解が大きな意味を持つと考えられた。著者は、本研究の目的を達成するため、3つの下位研究を実施した。研究1では、自己主導型学習と教師主導型学習の違いを検討し、改訂版グループメタ認知尺度 (GMS) 日本語版が自己主導型学習にも妥当性かつ信頼性があり、効果的であるかどうかを検証した。研究2は、学習者の特性によるグループ・レベルの自己調整への影響を検討した。研究3は、自己主導型学習におけるグループ・レベルの自己調整プロセスの理解を目指した。本論文は、7つの章と参考文献、4つの付録で構成されている。以下に各章の詳細を示す。

第1章は、本研究の背景、目的、意義を述べている。外国語学習者の多くに自律性が欠けている原因となっている社会的背景を探り、学習者の自律性に関する未解決の課題を4つ指摘している。本研究の意義は、自己主導型学習における学習者の自律性に関する研究を促進し、日本におけるグループ・レベルの自己調整に関する研究を進展させ、グループでの自己主導型学習における困難な点の理解に貢献することにあるとしている。

第2章では、学習者自律性に関する研究を4節にわたり概観している。第1節では、言語学習における自律性の重要性と、自己主導型学習や自己調整学習との密接な関係に焦点を当て、自律学習の社会的・個人的背景の重要性を指摘している。第2節では、グループでの自律学習における自己調整を測定するツールについて概観し、自己主導型学習における測定ツール開発の必要性を論じている。第3節では、自己調整学習における個人差に関する研究を概観し、自己主導型学習における当該分野の研究の不足を指摘している。第4節では、自己主導型学習における修正フィードバックに関する、主にタンドム学習における先行研究を概観し、タンドム学習者がグループ・レベルの自己調整をどのように活用して修正フィードバックを行うかについての理解がまだ不足しているとしている。

第3章では、本研究の方法を説明している。具体的には、研究1と研究2でのグループメタ認知尺度(GMS)質問紙を用いた量的研究について、ならびに、研究3でのタンデム学習におけるグループメタ認知に関する自由記述式質問紙を用いた質的研究について記述している。データはコンビニエンス・サンプリングによりオンラインで収集し、量的分析にはフリーソフトのRとJASPを、質的分析にはMicrosoft Excelを使用した。また、3つの研究の具体的な分析手順についても詳細に説明している。

第4章は、研究1の内容を記述している。研究対象者として60名がボランティアで参加した。これらの参加者は、18歳以上の日本語母語話者であり、eTandem言語学習の経験者であった。本研究で使用された質問紙のGMSは、eTandemの文脈に合わせて改訂し、日本語に翻訳した。分析手法として探索的因子分析とt検定を用い、その結果、日本語版GMSが高い信頼性と妥当性を持つことが示された。さらに、グループ・レベルの自己調整が日本の環境に適しているという考えも支持された。このため、今後は日本人サンプルを用いた日本語版GMSの検証を継続する研究が必要であるとしている。自己主導型学習の学習者と教師主導型学習の学習者の間のGMSスコアの差は、グループでの自律的学習におけるメタ認知スキルの改善の余地を示唆していると著者は主張している。

第5章は、研究2の内容を記述している。eTandem学習の文脈において改訂GMSの妥当性と信頼性を確認し、個人特性のGMS得点への影響を明らかにしている。対象者は91名のeTandem学習者で、全員が18歳以上の日本人英語学習者であった。分析手法として、探索的因子分析、t検定、分散分析が用いられた。この研究からは主に2つの重要な知見が得られた。一つ目は、改訂された自己主導型学習のためのGMSは有効であり、信頼性が高いことが確認されたことである。因子分析により確定された最終モデルは、14項目からなる4因子構造で、全分散の46.7%を説明していた。また、尺度全体のクロンバック・アルファ値は0.8で、高い内的一貫性を有していた。二つ目は、性別と学習時間の違いがGMS得点に有意な差をもたらすものの、その他の個人差要因によるGMS得点の有意差は見られなかったことである。

第6章は、研究3の内容について述べている。eTandem学習者が学習相手とどのように協働学習するかを理解するために、eTandem学習における修正フィードバックの授受を調査した。本研究の対象は11名のeTandem学習者で、英語母語話者の日本語学習者6名(英語母語話者と同等の英語力を持つ学習者を含む)と日本語母語話者の英語学習者5名から構成された。収集したデータは、主題分析により分析した。その結果、学習フィードバック提供者は、学習相手にどのようにフィードバックを提供するかを、自己の視点から考えていることがわかった。一方で、フィードバックの受け手は、自分から要求することなく、学習相手から提供されたフィードバックを受動的に受け入れていた。しかしながら、修正フィードバックに不満を持つ学習者はほとんどいなかった。これらの結果は、eTandem学習者が共同調整を好む傾向にあり、社会的共有調整を利用する学習者はほとんどいないことを示している。共同調整を好むeTandem学習者には、与える側も受ける側も、学習相手との事前の合意やコンセンサス形成のプロセスが欠けている。このことは、彼らが協働活動における自己の重要性や、タンデム学習における自己の役割と責任を完全に把握しているわけではないことを反映していると著者は主張する。

第7章では、研究の背景、目的、リサーチクエスチョンを再掲した後、3つの下位研究の示唆とそれらの考察を要約している。最後に、本研究の意義、限界、今後の研究の方向性が述べられている。本研究の重要な成果は、改訂GMSが自己主導型学習に適用可能なこと、自己主導型学習と教師主導型学習の間に違いが存在することを確認したことである。この研究は関連研究間の隔たりを埋めると同時に、自己主導型学習のスキルを評価する実用的な測定ツールを提供し、グループ・レベルでの自己調整のプロセスに関する洞察を新たに提供したと言えるであろう。本研究の限界は、尺度の一般化の難しさ、影響する要因の限界、サンプル数の限界などである。今後の研究では、改訂GMSの適用範囲を拡大し、グループ・レベルの自己調整の個人的特徴に関してより深く洞察を加え、豊富なデータと多様な研究方法で自己主導型学習におけるグループ・レベルの自己調整プロセスを探究することが期待される。